

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：14501
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2008 ～ 2011
 課題番号：20520074
 研究課題名（和文） 占領期・占領空間における戦争の文化的記憶に関する実証的研究
 研究課題名（英文） The research of Tangled memories on Occupied Japan.
 研究代表者
 長 志珠絵（ Shizue Osa ）
 神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授
 研究者番号：30271399

研究成果の概要（和文）：

本研究は、戦争の記憶をめぐる思想史的文化的問題系を占領期の記録を渉猟し、これらをテキストとして読み解くことを通じ、戦後日本及び米軍占領下沖縄を含めた戦争死者の想起文化と政治を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Record of the this research and occupation term was read and solved, and the war dead's remembrance culture and politics were clarified, during Postwar Japan as Occupied Japa and Occupied Okinawa of U.S. Forces.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,300,000 円	390,000 円	1,690,000 円
2009 年度	900,000 円	270,000 円	1,170,000 円
2010 年度	700,000 円	210,000 円	910,000 円
2011 年度	500,000 円	150,000 円	650,000 円
年度			
総計	3,400,000 円	1,020,000 円	4,420,000 円

研究分野：思想史

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：占領期 戦争の記憶 戦争の文化的記憶

1. 研究開始当初の背景

(1) 戦争の記憶論

本研究は、米国及び 東アジ ア地域で の戦争記憶に関わる文化理論研究の動向をふま

え、占領期の戦争認識に焦点をあてる。思想文化研究としての戦争の記憶研究は、一九九〇年代後半での第二次世界大戦を軸とした戦争の記憶が国境を越え、内向きの国民教育としてではなく、外国問題と化する時代的背景の

なか、当事者の記憶に重点をおき、隠された記憶の掘り起こしやオーラルヒストリーを通じ、証言のあり方や同時代の東アジア世界と隔てられた、戦後日本の空間認識など方法論的な議論を進めてきた。

(2) 課題の変化

今日、戦争の記憶論は課題としての次世代継承は重要な争点でもあり、記録のあり方に向けての多様な検討が必要である。特にこれまで戦争の記憶研究は、どのような質の記録に依拠してきたのか、思想文化論的分析としてはこの点についての射程が不可欠な段階を迎えている。いずれにせよアジア太平洋戦争の様々な出来事は、戦後多くの証言が積み重ねられ、今日ではグローバルヒストリーとして、移動する人びとや旧植民地の人びとの記憶や記録に踏み込んだ議論がなされ、こうした社会的関心のありように思想史文化史研究が答える必要性が問われている、と考える。

2. 研究の目的

申請者は、これまでの長年にわたるナショナリズム研究、占領期研究に関する研究蓄積から、戦争の記憶のあり方は事後の社会のあり方に大きく規定される、との着想を得た。また狭義には実際の戦争の時間（1941.12～1945.8）よりも米軍占領の時期が長期にわたることは、元来中国との戦争から始まったはずの戦争イメージを1941年以降に限定してイメージさせる点でも戦後日本の戦争認識を検討するうえで、ローカルな問題と考え、戦争の記憶とその政治学に注目する方法を検証する時間軸として、戦争の事後としての占領期に焦点をあてた。一方占領期は、占領期研究

として独自の蓄積を持ちつつも、通史のあるいは同時代的、さらには時代認識として日本史研究の領域でも戦後史の一部なのか、占領期として特化された時期なのか、時代像として共通理解がないまま個別に細分化された研究がなされている状況である。ことに占領期は戦後の出発点として戦時下と切り離されて検討されてきたため、戦争の記憶をポスト戦争の時代としての占領期に読み解く観点は本研究のオリジナルなものである。本研究はこうした占領期研究の状況をふまえて、記憶不在の占領期を記録の時代として多言語的にとらえ直すとともに、さらなる地域の記録を発掘し、読み解く目的を持って作業を進め、戦争の想起をめぐる文化思想史研究を文献実証として論じるとともに、戦後思想史における占領期の独自性と問題領域を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、記録の持つ言語の違いによる相互の解釈のズレや問題系の転移に注目した。具体的には、占領軍レコードとして1990年代以降、収集と編纂が飛躍的に進んだ英語史料(国立公文書館憲政資料室蔵GHQ/SCAP文書・米国民政府史料USCAR文書、立命館蔵GHQ/SCAP文書DB、沖縄県公文書館USCAR文書DB)を用い、戦争の死者に関わる問題領域を発見し、ここで得た事例を地方公文書館での県庁文書史料とつぎあわせ、相互のズレと解明作業を進めることで、戦争認識のありようにせまろうとするものである。またテキスト分析にあたっては思想史手法によってテキストを文脈において読む作業を進めてきた。

4. 研究成果

(1) 総括的成果

言語の違いによる記録の違いがどのような認識のずれをもたらすのか。米軍資料(SCAP/GHQ)及び沖縄占領のUSCARのDB)中のキーワード、War Victim、War Deadに関わる案件の重要性とともに、外務省外交史料館を含め、日本の府県単位での公文書館の史料調査や自治体刊行資料とつきあわせ、戦争死者論や戦争シンボル論、モニュメント論等具体的な問題領域を通じ、戦争死者をめぐる理解の違い、「事件」の語られ方のズレと異同という問題領域を明らかにすることができた。たとえば戦没者と訳されるWar deadをめぐる、占領期の文脈ではこの語彙が本土では空襲死者との競合関係にあったこと、また沖縄では今日の摩文仁の丘形成を支える戦場の死者の捉え方と密接な関係にあったことなどを明らかにしえた。

(2) 成果と学会、メディア等との関係

空襲研究は地域の市民運動をはじめ異なる領域で研究蓄積があり、他方、戦争死者をアカデミズム的手法によって論じてきた研究領域は、たとえば近年での地域の郷土部隊を中心とした兵士研究の動向等である。しかし占領期の一次史料とそこから可能な新たな事実及びその言説分析においては、両者は重なりあい、密接に関係する問題系であったことがわかった。また戦後65年を経て、改めて空襲死者の扱いについて、新たな社会的関心が高まっており、学会でのコメントや総括を求められるほか(歴史学研究会大会の現代史部会報告での、空襲研究ほか、戦争の記憶を扱った大会報告に対する記録と批判-「大会報告批判 山本唯人・ポス

ト冷戦における東京大空襲と「記憶」の空間をめぐる政治、飯島みどり抵抗の記憶』『歴史学研究』874号)、戦後生まれの新聞記者からの取材に応じることが増え、社会に研究の成果を還元する機会となった。東京空襲死者については調査と発表論文の成果の一部が新聞記事に掲載された(「東京空襲、日本が遺骨合葬を米に提案」『東京新聞』朝刊、2009.3/8)。また神戸空襲について、兵庫図書館が委託所蔵している神戸空襲についての原史料及び記録の整理作業を行ったが、これらについても取材を受け、社会面での記事となった(「神戸大空襲資料をデータベース化」『神戸新聞』、2008.8/6)。

このように本研究は本土占領期を中心に米軍資料と行政文書をつきあわせることで、戦争死者一般からさらに問題を深め、空襲死者の問題系という領域への新たなアプローチを可能にした。なお本研究の成果は単著の近刊として刊行予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 長志珠絵「空襲研究」から考える(『日本思想史研究会会報』27、2010.4、1-11頁)査読あり
- ② 長志珠絵「Defeat, Occupation, and National Symbols」(『1950年代における「サークル活動」の文化史的研究』基盤研究(B)研究代表 成田龍一、うち89~128頁、2009.3)、査読なし。
- ③ 長志珠絵「占領期のマスキュリニティ」

(国際シンポジウム特集号『立命館大学言語文化研究』20-3、79-87頁、2009.2)、査読なし

- ④ 長志珠絵「戦時下の「満鮮支」視察旅行とその記録」、『전북사학 (ハンゲル、全北史学)』, 34号、275～313頁、2009. 査読あり

⑤ 長志珠絵「<過去>を消費する一日中戦争下の「満支」学校ツーリズム」(『思想』1042号、94～120頁、2011.2) 査読なし

[学会発表] (計5件)

① 長志珠絵「占領期研究の可能性」, 単独, 立命館大学-グローバル COE「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」シンポジウム「占領期京都を考える」2012.3.16, 京都

② 長志珠絵「占領期における<空襲>をめぐる政治-を問うこと」単独, 第24回戦争災害研究室研究会 2010.1.29、東京大空襲戦災資料センター

③ 長志珠絵「帝国の歴史学とポストコロニアルの課題」共同パネル報告, 日本思想史学会大会、2009.10.17、東北大学

④ 長志珠絵「コメント 「韓国改新教の癒しに関する研究」をめぐって」, 単独, 国際学会, 第一回東アジア宗教文化学会大会, 北海道大学, 2009.8、北海道大学

⑤ 長志珠絵「帝国の空間と移動する身体-戦跡ツーリズムにみる歴史表現-」単独報告, 韓国・漢陽大学校比較史比較文化研究所主催、国際シンポジウム「グローバル化時代の植民地主義とナショナリズム」2008.11.13、漢陽大学校 (大韓民国)

[図書] (計6件)

① 長志珠絵『戦後としての占領期・占領空間』有志舎, 2012.12 刊行予定.

② 長志珠絵 (共著)『第日本帝国の時代 (Jr. 日本史第6巻)』小学館, 2011 298 ページ

③ 長志珠絵 (共著)『近代知の成立』(ハンゲル), Somyong Publishing, 2011.264 ページ

④ 長志珠絵 (共著)『自由社版『新編 新しい歴史教科書でどう教えるか-近現代編』横浜教科書研究会, 2011. 149 ページ

② 長志珠絵 (共著)『秦荘の歴史』第四巻資料編愛荘町、2009 500 ページ

③ 長志珠絵 (共著)『社会秩序と暴力・戦争』明石書店, 2009 324 ページ

① 長志珠絵 (共著)『資料で読む戦後日本と愛国心』第3巻、日本図書センター、2008 679 ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長 志珠絵 (Shizue Osa)

神戸大学・大学院国際文化学研究所・教授

研究者番号: 30271399